

世界文学全集 II-13

ジョイス

ユリシーズ

I

丸谷オー 永川玲二 高松雄一 訳

河出書房

世界文学全集 Ⅱ-13 ジョイス I



© 1975

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和39年 8月10日 初版発行
昭和55年 2月28日 21版発行

訳者	丸永高	谷川松	才玲雄	一二一
発行	清水	水		勝
印刷	大柴	柴	守	子
装幀	原			弘
印刷	刷・株式会社 享有堂印刷所			
製本	本・岸田製本紙工業株式会社			

発行所 東京都渋谷区 千駄ヶ谷2-23-2 株式会社 河出書房新社

電話東京 (404) 1201 営業
(404) 8611 編集
振替番号 東京 0-10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります。

目 次

ユリシイズ I

第一部

1	テレーマコス	六
2	ネストール	三
3	プロテウス	四六

第二部

4	カリュプソー	六八
5	食蓮人たち	八七
6	ハーデス	一〇八

7	アイオロス	一四五
8	ライストリュゴン人	一八七
9	スキュレーとカリュブデイス	二三〇
10	さまよえる岩	二七五
11	セイレーン	三三三
12	キュクロプス	三七〇
訳注		四三六
解説		四三七
付参考地図		四三七
	(訳者)	四三七

ユ
リ
シ
ー
ズ
I

主要人物

レオポルト・ブルーム 愛称ポールディー。三十八歳。転転と職をかえた末、現在はダブリンの新聞「フリーマン」の広告とり。ハンガリー系ユダヤ人。父ルドルフ・ヴィラグ（のちにルドルフ・ブルームと改名）は十八年前に自殺。一人息子ルーディーは十年前に生後まもなく死亡。失われた息子を求める気持は十五歳になる娘ミリー（写真屋の見習）への愛にもかかわらずますます募るばかりである。寛大な夫ではあるが、妻モリーとボイランの情事に気づいて悩んでいるし、しかも彼自身ヘンリー・フラワーという偽名で、マーサ・クリフォードというタイピストとの文通を楽しみにしている。一九〇四年（明治三十七年）六月十六日、ブルームは

朝食の支度をし、郵便局でマーサの手紙を受取り、友人パデュー・ディグナムの葬儀に列席し、キーズ商店の広告の件でフリーマン社にゆき、昼食をとり、図書館で広告の図案を探し、古本屋で「罪の甘き」という本を買い、午後四時ごろオーモンド・ホテルのバーでマーサへの返事を書き、バーニー・キアナンの酒場では〈市民〉という熱狂的なナシ・ナリストから罵られるのだが、もちろんこれだけでは、この典型的な現代人ブルームの「ブルームの日」における冒険はまだ半ばを終わっただけである。果して彼は、失われた息子を見出すことが出来るだろうか？

メアリアン・ブルーム 愛称モリー。ブルームの妻。三十

四歳。歌手。ジブラルタル要塞勤務の連隊鼓手長トウィーデ
イとスペイン女とのあいだに生れた。数多くの男たちと交渉
があったが、現在は二十五人目の恋人ボーランが相手。

ブレイゼス・ボーラン モリーの恋人。裕福な広告業者で
独身者。陽気な伊達男で興行の才能もあり、現在モリーの演
奏旅行を計画中。午後四時、オーモンド・ホテルから二輪馬
車に乗って、夫ブルームが外出中のモリーを訪れる。

ステイヴン・ディーダラス 二十二歳。ダブリンの文学
青年。ローマ・カトリックの信仰を捨て、文学に身を献げよ
うとしてパリに去った（「若い芸術家の肖像」参照）のだ
が、母危篤を告げる電報によってダブリンへ戻った。母の死
後、みじめな生活をしている家族と別居、ダブリン湾に臨む
マーテロ塔に友人たちと共に住み、ディージー校長の下で教

師をしながら虚しい日々を送っている。彼はダブリンの文壇
で全盛のアイランド文芸復興の運動に対してもきわめて傍
觀的だし、わたしのために折っておくれという母の臨終の願
いを拒否した思ひ出は、今も彼の心を疼かせている。そし
て、善良でだらしない父、サイモン・ディーダラスに対し
ても不満をいだいている。友人は彼を評して「父を探すヤベ
テ」と言っただけども、果してステイヴンは失われた父を
見出すだろうか？

マラカイ・マリガン 通称バック。ステイヴンの友人で
ある医学生。ステイヴンやヘインズ（アイランド民俗の
研究のためダブリンに来ている、オクスフォード大学卒業
生。イギリス人）といっしょにマーテロ塔に住んでいる。陽
気で冒瀆的な毒舌家。

第一部

押しだしのいい、ふとっちょのバック・マリガンが、シャボンの泡のはいつている腕を持って、階段のいちばん上から現れた。腕の上には手鏡と剃刀が交叉して置かれ、十字架の形になっていた。紐のほどけた黄いろいガウンは、おだやかな朝の風に吹かれてふうわりと、うしろのほうへ持ちあがっていた。彼は腕を高くかかげて唱えた。

——われ天主の祭壇に赴かん。

立ちどまると、のぞきこむようにして暗い螺旋階段を見おろし、荒っぽく呼びたてた。

——来いよ、キンチ。あがって来い。大べらぼうなイエズス会士め。

彼はおごそかな足どりで進み出ると、まるい砲台にあらがった。あたりを見まわし、塔と、まわりの田園と、目覚めかけている山々とに向って、三度、重々しく祝福を

与えた。それから、ステイーヴン・デイーダラスの姿を見かけると、そっちのほうにかがみこんで、咽喉をごろごろ鳴らし頭を振りながら、すばやく空に十字を切った。ねむくて機嫌の悪いステイーヴン・デイーダラスは階段のいちばん上に両手をついて、首を振り咽喉を鳴らしながら自分に祝福を与えているその馬面や、木目のとおった淡い色の柵材のような、あかるい、剃髪していない髪の毛を眺めた。

バック・マリガンはちょっと鏡の下をのぞいてから、また、びしゃりと腕に蓋をした。

——兵営に戻るんだ、と彼はきびしい口調で言った。それから、説教師の声色でつけくわえた。

——なんとなれば、おお、みなさん、これこそ聖なる聖体だからであります。肉体であり、靈魂であり、血であり、槍傷の痕だからであります。音楽をゆるやかに、どうぞ。諸君、眼をつむってください。ちょっとお待ちを。この白血球どもが少しざわついていきますのでな。さあ、みんな静かに。

彼は流し目でじろりと見あげると、長く低く合図の口笛を吹き、しばらくじっと聞き耳を立てた。きれいな白い歯なみのそこが、金いろにちかちかと光った。金

の口を持つ者（雄弁家であつた型）。二度、強い鋭い口笛があたりの静けさを破つて答えた。

——ようし、ごころう。彼は勢いよく叫んだ。これであまくゆくだろうぜ。スイッチを切つてくれたまえ。

彼は砲床から飛びおると、広がったガウンの裾を足のまわりに巻きつけながら、じつと眺めていた相手を重重しく見かえた。肉づきのいい暗い顔と、むつくりした卵がたの顎とが、中世の芸術の保護者である修道院長のように見えた。気持のいい微笑が、静かに、唇の上にひろがった。

——お笑い草だな、と彼は楽しそうに言った。君のばかげた名前ときたら。まるで古代ギリシア人だよ。

彼はからかうように指を突きつけると、ひとり笑いをしながら胸壁のそばへ歩いて行つた。ステイーヴン・デイーダラスは階段から上にあがつて、ぼんやりと途中までついてゆき、砲床の端に腰をおろした。そして、彼が胸壁の上に鏡を立てかけ、ブラシを腕にひたし、頬と首にシャボンの泡を塗りたるところを眺めていた。

バック・マリガンの楽しげな声はつづいた。

——おれの名前だっておかしいや。マラカイ・マリガン。強弱弱格が二つだ。でも、こいつにもギリシアふう

の響きがあるじゃないかね。それこそ牡鹿みたいに軽やかで、楽しげなもんだぜ。二人でアテネへでもゆかなきゃな。伯母から二十ポンドせしめて来たら、君もゆくかい？

彼はブラシをそばに置くと、浮かれて笑いながら叫んだ。

——ゆくかね？ すかんびんのイエズス会士君は。口を閉じて、彼は念いりにひげを剃りはじめた。

——ねえ、マリガン、とステイーヴンは静かに言った。

——なんだね。

——いったい、ヘインズはいつまでこの塔にいるつもりなんだい？

バック・マリガンは剃りあげた頬を、右の肩ごしに向けた。

——まったく、あきれた奴じゃないか、と彼は無遠慮に言った。血のめぐりの悪いサクソン野郎め。君なんて紳士のうちにはいらんと思つてやがる。まったく、イギリスの野郎どもと来たら。金と消化不良ではちきれそうになつちまいやがつて。あいつ、オクスフォード出だつてことを鼻にかけているのさ。でもなあ、デイーダラス、

君のほうがよっぽど本物のオクスフォード出らしいぜ。あいつには君が判らないんだ。君には、おれがつけた名前がいちばんびったりしてるよ。短刀のキンチってのがね。

彼は注意深く顎の上を剃った。

——一晩じゅう、黒豹が出たなんてうわごとを言ってたぜ、とステイーヴンが言った。獵銃なんて持ってないくせに。

——ひでえ氣ちがいだ、とマリガンが言った。こわかったか？

——こわかったさ、とステイーヴンはますますこわくなってきたように、力をこめて言った。黒豹を撃つとかなんとか、嗅いたり唸ったりしてる得体の知れぬ男と、暗いところにいっしょにいるなんて。君はおぼれかけた連中を救ってやったりしたさ。でも、ぼくは英雄じゃない。あいつがずっとここにいるんなら、ぼくは出てゆく。バック・マリガンは眉をひそめ、剃刀の刃にくっついてるシャボンの泡をみつめた。そして、ひょいと足場からおりと、ズボンのポケットをせわしげに探りはじめた。

——畜生、と彼はだみ声で叫んだ。

彼は砲床のそばへ来て、ステイーヴンの胸ポケットに片手を突っこみながら言った。

——剃刀をぬぐうために、鼻ふきを拝借いたしたい。

ステイーヴンが、さすがにまかにまかせていると、マリガンは、きたないよれよれのハンカチの端をつまんでひっぱりだし、ひろげて見せた。彼は剃刀の刃をきれいにぬぐった。それから、ハンカチをつくづくと眺めて言った。

——歌読みびとの鼻ふき布。わがアイルランド詩人たちの新しき芸術の色。すなわち、青っぱなの緑いろ。まったく、なめてみたくなるような色じゃないか。

彼はもういちど胸壁にのぼって、ダブリン湾を眺めわたした。櫓材のように薄い色の金髪がかすかになびいた。

——まったく、と彼は静かに言った。海ってアルジャー（イギリス世紀末の詩人、スウィンバーン）の言うとおりじゃないか。やさしい白髪之母親だよ。青っぱな緑の海。寧ろ丸をひきしめる海。葡萄酒いろの海へ。なあ、ディーダラス、ギリシア人はりっぱだぜ。ぜひと君に教えてやらなくちゃ。原語で読まなきゃ駄目だよ。海よ！海よ！彼女こそわれらがたいなる優しき母だ。見においでよ。

ステイヴンは立ちあがって、胸壁へ行った。胸壁にもたれかかって、水面を見おろし、キングズタウンの港口を出てゆく郵便船を見おろした。

——われらが大きいなる母よ、とバック・マリガンが言った。

彼は不意に、大きな探るような眼を海からステイヴンの顔へ向けなおした。

——伯母は、君がお母さんを殺したと思ひこんでいるのさ。だから、おれが君とつきあうのを厭がる。

——誰かが殺したようなもんだらうよ、とステイヴンは陰気な口調で言った。

——まったく、ひざまずいて祈るぐらいならしてやつてもよかったらうにな。死にかけてるお母さんの頼みだもの、とバック・マリガンが言った。おれだって君と同じくらい冷血動物だ。だけど、いまわの際で、わたしのためにひざまずいて祈ってくれと頼んでるお母さんのこと考えてみる。なのに、君はいやだと言ったんだ。どうも君には邪悪の相があるぜ……

彼は言葉を切って、反対側の頬にそっとシャボンの泡を塗りつけた。寛大な微笑が口もとに浮んだ。

——でも、お見事な道化役者だな、と彼は独言を言った。

た。キンチよ、こんな見事な道化役者もないもんだぜ。彼は黙りこんで、まじめな顔ををし、むらのないよう念入りにひげを剃った。

ステイヴンはざらざらした大理石に片肘をついて、掌を額に当て、すりきれた黒い上衣の袖口のほつれをじっとみつめた。苦しみが、まだ愛の苦悩とは言えない苦しみが、彼の心をさいなんだ。母は死んでから、音もなく、夢のなかで、彼のもとに現れた。ゆるやかな褐色の経帷子にくるまれた、痩せ細った体は、蠟と紫檀の香りがしたし、黙って、とがめるように彼の上にかがみこむとき、母の吐く息には濡れた灰の匂いが仄かにあった。

そばにいる栄養たっぷりな声が大いなる優しき母とたたえた海が、すりきれた袖口ごしに見えた。湾と水平線の作る環が、暗緑色の水のかたまりを抱きこんでいた。母の死の床のそばに白い陶器の洗ひ桶が置いてあった。そのなかには、母が大声で呻きながら腐りかけた肝臓のなから吐き出した、緑いろの胆汁がどろりと溜っていた。

バック・マリガンがまた剃刀の刃をぬぐった。

——やれやれ、哀れな犬ころ君よ、と彼は優しい声で言った。シャツを一枚と鼻ふき布の二三枚もくれてやら

ずばなるまいな。その中^{セコンドハンド} 古のズボンの具合はどう？

——どうやら合うようだよ、とステイーヴンは答えた。

バック・マリガンは下唇のくぼみを剃りにかかった。

——お笑い草だ、と彼は満足そうに言った。古^{セコンドレグ} 足と言うべきところかな。どこの梅毒やみがいしたものか知らないが。おれのところに細縞の上等なのが一着あるんだけどね。グレーの奴だ。そいつをはけば、すてきにみえるぜ。冗談いつてるんじゃないよ、キンチ。君が身ごしらえしたら、とてもよく似合うと思う。

——ありがとう、とステイーヴンは言った。でも、グレーのじゃ、はくわけにゆかない。

——はくわけにやゆかない、とバック・マリガンは鏡のなかの顔に話しかけた。エチケツトはエチケツトだつてさ。こいつはお母さんを殺しておきながら、グレーのズボンははくわけにゆかないんだそうだ。

彼は剃刀をきちんとたたみこむと、指さきで滑らかな皮膚を撫でまわした。

ステイーヴンは海から視線をそらして、薄い青の表情たつぷりな眼をした、肉づきのいい顔を見つめた。

——ゆうべ「シップ」^(場)でいっしょになったあの男

が、とバック・マリガンは言った。君はg・p・iにかかっていて言ってたぞ。あの男はコノリー・ノーマンの同僚で、精神病院に勤めているんだ。g・p・i、すなわち痴呆性全身麻痺。

彼は鏡で空に半円を描き、ちょうどいま海上に輝いている日の光を反射させて、信号を送るそぶりをした。剃りたての唇がほころびて笑い、白いちかちか光る歯のさきがのぞいた。笑いがそのがっしりと引きしまった体を捕えた。

——てめえの顔でも見ろよ、と彼は言った。ごたいそうな詩人さん。

ステイーヴンは身をかがめて、自分に突き出された鏡のぞいた。鏡のゆがんだひびに切り裂かれている顔、逆立った髪。彼やほかの奴らは、こんなぼくを見ているのか。こんな顔を誰がぼくに選んでくれたんだ。蚤^{ノミ}にたかられているこの犬^{イヌ}ころめ。こいつのほうでもぼくに訊いている。

——女中の部屋からくすねて来たんだ、とバック・マリガンが言った。いいみせしめさ。伯母はマラカイのためにといいわけで、器量の悪い召使ばかり雇うんだ。彼を誘惑するなかれ、さ。おまけに彼女の名前がアーシュ

ラ(アーシユラといふ聖女がいる)とおいでなすった。

また笑い出しながら、彼はのぞきこんでいるステイヴンの眼の前から鏡を取った。

——鏡におのれの顔を見出し得ぬ(ワイルド「ドリアン」(グレイの肖像)の序文)キャリバン(ワイルド)の怒り、かね、と彼は言った。もしワイルドが生きてて、君を見たらなあ。

体を引いて指さしながら、ステイヴンは皮肉な口調で言った。

——これはアイルランド芸術の象徴だよ、ひびのいた女中の鏡ってのは。

バック・マリガンは不意にステイヴンの腕をとって、塔の上を歩きまわった。ポケットに突っこんだ剃刀と鏡がかたかたと鳴った。

——こんなふうに君をからかっちゃ悪いよね、キンチ、と彼は優しい口調で言った。君は誰よりも根性のあつ男なんだから。

また、はぐらかされちゃった。こいつはぼくの芸術の披針(シフト)がこわいんだ。ぼくがこの男のをこわがっているのとおなじくらいに。冷たい鋼鉄のペンが。

——ひびのいった女中の鏡か。下のオクスフォード先生に教えて、一ギニーせしめてやれよ。あいつには喰る

ほど金があるんだし、それに、君を紳士だなんて思っちゃいけないんだから。あいつのおやじはズルー族にヤラッパ根を売り込むとかいういかさまをやつて、しこたま儲けた。まったく、キンチ、君とおれと組んで仕事をすれば、この国の役に立つこともできようってものだぜ。ギリシアふうに変えろとかさ。

克蘭リー(「若い芸術家の肖像」に登場するステイヴンの親友)の腕。こいつの腕。

——なのに、君がこんな豚どもからほどこしを受けなきゃならないなんて。君がどれほどの人間か知ってるのは、このおれだけなんだぜ。どうしてもっと信用してくれないんだい？ おれのどこが気にいらない？ ヘインズのことかい？ あいつがちょっとでもごてるようなら、シーモアを連れて来て、クライヴ・ケンプソープよりもっとひどい目にあわせてやる。

クライヴ・ケンプソープの部屋から聞えてくる金持の若僧どもの叫び声。白人ども。奴らは腹をかかえて笑いこける。たがいに抱きあつて。ああ、死にそうだ！ オーブリー、おれが死んだら、おふくろがびっくりしないようにして知らせさせてやってくれ！ 死んじまうよ！ ぼろぼろに垂れさがったシャツの切れ端をリボンみたいになびかせて、奴はテーブルのまわりをころげまわる。

踵^{かかと}までズボンをずりおろして。裁^たちばさみをひつつかんだモードリン学寮のエイディーズが追いかけてます。マーマレードを塗りたくられ、怯^{おそ}えきつた犢^{うし}の顔。ズボンをぬぐなんていやだってば！ 妙な真似^{まね}はよしてくれつたら！

開け放った窓から流れ出る叫び声が、校庭の夕暮を驚かす。エプロンをかけたつんぼの園丁が、マッシュ・アーノルドそっくりの顔で、薄暗い芝生の上に草刈り機を押しゆく。芝の飛び散る葉をじつとみつめながら。

われらみずからの為に(アイランド独立運動の結社)
(シン・フライング党の標語)……
 新しい異教主義……世界の中心。

——あの男は置いてやれよ、とステイヴンは言った。夜は参るけど、あとは別にどうってことないもの。

——じゃあ、どうしたっていうんだ、とバック・マリガンがじれったそうに訊ねた。言っちまえよ。おれのほうは何ひとつかくしだしてないんだぜ。ねえ、おれのどこが気にいらない？

二人は立ちどまった。眠りこんだ鯨の鼻づらみたいに海の上に横たわっている、ブレイ・ヘッドのまるい岬に眼をやりながら。ステイヴンはそっと腕を振りほどこいた。

——ほんとに聞きたいのかい？ と彼は訊ねた。

——ああ。どういうことなんだ？ バック・マリガンが答えた。おれには何も覚えがないがね。

彼はしゃべりながらステイヴンの顔をのぞきこんだ。そよ風が彼の額をよぎり、乱れた金髪をなぶり、不安そうな瞳のなかの銀いろの光をゆらめかせた。

ステイヴンは自分の声にうんざりしながら言った。

——おふくろが死んでから、はじめて君の家に行った日のこと覚えてるかい？

バック・マリガンはすばやく顔をしかめて言った。

——なんだって？ どこへ？ おれは何も覚えてないよ。覚えてるのは観念と感覚だけなんだ。なぜなんだ？ いったい、どうしたっていうんだい？

——君はお茶をいれてた、とステイヴンが言った。

ぼくは踊り場を通ってお湯を取りに行った。君のお母さんがお客といっしょに客間から出て来た。そして、おまえの部屋にいるのは誰かって聞いたんだ。

——それで？ バック・マリガンが言った。おれがなんて言った？ もう忘れちゃったよ。

——君はこう言ったんだ、とステイヴンは答えた。「ああ、あれはデューダラスですよ。あいつのお母さん